

看護と介護の連携教育

高見 清美 氏

前学校法人 大阪滋慶学園 大阪保健福祉専門学校

豊田 百合子 氏

学校法人 大阪滋慶学園 大阪保健福祉専門学校



要旨

超高齢社会を迎え、医療と福祉の質の高い連携がさらに求められている中で、医療依存度の高い要介護者が増加している。そのため、日常生活ケアに直接的に関わる「看護と介護」のより良い連携は喫緊の課題である。しかし、その連携を妨げる要因に職種別部署のセクショナリズムがあげられ、基礎教育の段階で連携教育が重要視されている。そして指導にあたる立場にある教員、指導者が十分に双方の役割、業務内容、価値観、教育背景などについて理解できていない現状も見受けられる。そこで、学生が自分の考えや価値観とともに、他職種の価値観、考え方の違いを尊重しつつ、相互理解を基盤として協働でチームを形成し維持する(チームマネジメント)ことができるため、今回、**活動1**として臨床施設と連携し連絡会議を行いながら地域(臨床)とより連携した教育の場の基礎づくり、**活動2**として、教員の学習会からスタートし、教材検討などを行った上で医療・福祉系教員の連携による看護学科、介護福祉科学生への連携授業の実践、**活動3**として地域(臨床)における課題把握を行うためのアンケート調査などを実施し、さらに今後の課題を明確化につなげた。この3つの活動の相互関連の中で、今後、増加する認知症ケアへの取り組みを含め、地域と連携したより質の高い多職種連携教育へと発展させていくための基礎づくりを行った。本報告では、その成果について述べる。

1.背景・目的

超高齢社会の今、効率のよい質の高いチーム医療が求められている。特に医療と福祉の連携は大きな課題であり、その中でも人々の「いのちと日常生活」に直接関わる看護と介護のより良い連携は喫緊の課題である。しかしその連携を妨げる要因として、セクショナリズムがあげられ、基礎教育の段階からの連携教育が重視されている。そこでは学生の指導に関わる者が双方の職種の役割、業務内容、価値観などについて十分理解し臨床・学生・教員が共に学びあう場が必要となる。今回、以下の3つの活動を通し、より質の高い多職種連携教育へと発展させていくための基礎づくりを行ったのでここに報告する。

2.活動報告

活動1 地域(臨床)との連携した教育の場の基礎づくり：【実施経過】実施経過は表1に示す。【結果】看護、介護

を実践する双方の臨床施設の基礎教育における連携教育への関心と理解を深め臨床、学校教員の学生指導に向けた教育課題を明確化し共有するとともに相互に学びあう機会となった。

表1 活動1の実施経過

	概要
5/9	教員研修：臨床施設での看護、介護のケア実践
6/17	第1回臨床施設連絡会議 教員6名 臨床施設より3名○臨床での状況、学生の状況、今の時代の教育内容などを情報交換。○臨床の連携の実際から連携についての課題に関する提案。教育への反映のあり方について協議する。
8月	認知症サポーター講習受講(全学生)
11/12	外部講師による公開講座：「チーム医療とは何か」細田満知子(星稜大学副学長) 広く地域の臨床施設に対し案内を行う。チーム医療に関する基本的内容の講義の後、多職種(看護職、介護職・事務職など)によるワークショップを実施。
1/23	第2回臨床施設連絡会議 教員6名 臨床施設より3名 ○活動2で実施した学生への連携授業の状況報告および学生の反応、臨床施設のアンケート結果から今後の教育課題について検討。
2月	介護福祉科実習指導者会議での情報提供、共通認識を図る

活動2 学生への連携授業の実施：【実施経過】学生の連携授業は4つのステップで実施した(表2)。双方の学科の学生のレディネス、臨床施設からの要望などを踏まえ、またステップを1段階終了することに振り返りを行い計画の微調整を行っていった。【結果】学生の授業アン

ケートからはステップ1の講義では双方の職種への関心を高め、ステップ2では具体的事例展開から看護過程と介護過程の注目点の違いと共通点の理解を深めることができた。ステップ3では、お互いが持つ力を引き出し合いながら共同作業を進めていく様子が見られた。しかし、ロールプレイングでは自職種の役割にこだわりすぎる状況が見受けられ、看護師が情報提供し介護職がそれに応ずるといった場面が多く見られた。これは学生が実習で看護職と介護職がケアを共にする場面を見る機会が少なく、臨床のあり方の反映とも考えられた。そこでステップ4では、教員による連携モデルロールプレイを実施。その中から自職種しかできないこと、また双方の職種とも出来ること(共通点)、利用者中心のケアとなるために、その場においてどの職種がどのように動くのがよいのか、家族を含めどの職種と連携することが必要か、授業を振り返りながら、さらに気づきや理解を深める場となった。授業アンケートの結果では6つの科目目標のそれぞれにおいて8~9割の学生が達成できたと回答した。また、その過程で看護・介護連携ワークブックの作成を行い、そのイラストをアート系の関連校に依頼したり、滋慶教育科学研究所での学会発表や「看護と介護の人材養成」の座談会などを通し、医療職以外の学生、教員、他部門、他機関に対し広く関心と理解を得ることにつながった。

表2 活動2の実施経過

日程	実施内容
5月	中旬~下旬 授業前アンケートの実施
ステップ1 概念を知る(講義)	
看護学科学生に対し、介護福祉科教員が、また介護福祉科学生に対し、看護学科教員が講義を実施	
5/22 30	講義1 チーム医療の意義~看護と介護の連携の必要性~
5/16 6/6	講義2 連携のために必要なチームマネジメントのスキル
ステップ2 自職種の役割を知る(グループワーク)	
事例検討(グループワーク) 褥瘡のある利用者へのケア 双方の学科ごとに事例検討のグループワーク実施後発表	
7/1 16	事例検討(グループワーク)
7/22 29	双方の学科合同でのグループワーク発表
ステップ3 お互いの役割を知る(ロールプレイングによる役割取得)	
事例検討で考えた利用者の援助について、双方の職種の役割を理解しながら連携しながらロールプレイングで表現する。	
10/20 21	ロールプレイング準備(目標共有・援助内容の抽出)
10/24	ロールプレイング準備(シナリオ作成)
10/31	ロールプレイング発表
ステップ4 連携モデルから学びをまとめる(教員によるモデルロールプレイ、授業のふり返し)	
11/21	看護学科教員、介護福祉科教員による連携モデル演技 学びの振り返り
11月	授業後アンケートの実施
2~3月	授業実施後の看護と介護の連携ワークブックの見直し検討 ワークブックの完成、印刷

活動3 地域(臨床)における課題把握:【実施と結果】

大阪府内の臨床施設(350施設)約1200部署への郵送の結果441施設より回答を得た。アンケート結果では、全般的に介護職より看護職が連携はできていると高く評価し、また双方とも役割は知っているが、具体的方法(行動)

が十分理解されていないとする傾向が見られた。看護職と介護職では連携に対する意識の違いがあること、連携を妨げる要因として教育背景の違いを最も多くあげていることが明らかとなった。また基礎教育卒業時に身につける力として、双方の職種とも患者・利用者中心の姿勢、報告・連絡・相談、倫理姿勢が高く、次いでそれぞれの職業の専門的技術があげられた。(表3)

表3 臨床施設が基礎教育卒業時に求める連携のための能力

看護師基礎教育卒業時に求める能力		得点
1	必要な情報について連絡・相談・報告できる。	3.7
2	患者・利用者中心に物事を考えることができる。	3.61
3	対人職としての倫理的感受性がある。(対象を尊重する姿勢がある)	3.59
4	患者・利用者がもつ疾患に対する基礎的知識がある。	3.49
5	患者・利用者の身体状態をしっかり把握する力(フィジカル・アセスメント能力)	3.48
6	日常生活支援、診療の補助に関する基礎的な看護技術を提供することができる。	3.48
7	基礎的な健康自己管理能力を持ちケア提供ができる。	3.41
介護福祉士基礎教育卒業時に求める能力		得点
1	必要な情報について連絡・相談・報告できる。	3.69
2	患者・利用者中心に物事を考えることができる。	3.65
3	対人職としての倫理的感受性がある。(対象を尊重する姿勢がある)	3.57
4	日常生活支援に関する基礎的な介護技術を提供することができる。	3.41
5	基礎的な健康自己管理能力を持ちケア提供ができる。	3.4
6	より良いケアのためのチーム連携の必要性を理解している。	3.4
7	より良いケアのための他職種(看護)との情報共有の重要性を理解している。	3.38

*質問項目17項目のうち得点の高い7項目 4段階評価

3.今後の課題

さらに3つの活動を連関させながら、並行して行っている認知症サポーターの学生の地域貢献活動を進め、専門職・非専門職を問わないケアの連鎖の中で、より地域に根ざした効果的な教育環境を調整していきたい。

